

石山寺藏仏説太子須陀拏経平安中期点における訓読語の文体

松本光隆

【キーワード】 仏説太子須陀拏経平安中期点、天尔波留点（別流）、説話漢文の訓読文体、天台宗山門派

はじめに

本稿に取り上げようとする石山寺藏仏説太子須陀拏経平安中期点は、小林芳規博士をファーストオーサーとして、昭和五十九年五月に、鈴木恵氏と稿者が連名で、『訓点語と訓点資料』誌、第七十一・七十二輯合併号として公にした資料である。同誌には、小林芳規博士の解説論文と共に、広島大学大学院博士課程後期の国語学演習において、小林博士のご指導の下に作成し、後、改訂した訓読文と、模写本文、語彙索引、漢字索引を掲載したものである。

本稿は、これを元に、同資料の説話漢文の訓読語の文体について、小林博士の解説に若干の補論を記そうとするものである。

仏説太子須陀拏経平安中期点の書誌事項は、小林博士の「石山寺藏仏説太子須陀拏経平安中期点の訓読語について」（以下、小林解説と称する）に詳しいので、御稿に譲りたいが、必要と思われる情報だけについて触れておく。

仏説太子須陀拏経平安中期点は、平安時代中期と推定される白点加点点の資料で、加点点は確認されない。ヲコト点の形式は、第四群点に属する天尔波留点（別流）である。小林解説では、天尔波留点（別流）加点点資料二点を取り上げて、「天台宗比叡山で使われたものであろう」と推定されて

いるが、築島裕博士も、天尔波留点（別流）加点点の十六資料を収集されて、「第四群点は、平安時代初期から恐らく南都の古宗の間で成立したのであらうが、平安時代中期以後には天台宗延暦寺に伝わり、恐らく平安時代中期頃にそこで天尔波留点・天尔波留点（別流）が案出されたのであらう。（中略）その勢力は微弱で、十二世紀中葉には殆ど衰滅してしまつてゐた」と述べられている¹⁾。本資料の言語の場合は、平安中期の天台宗比叡山に有つたと見ることが許されよう。

本資料には、小林解説に「八、和文系の語詞とその使用場面」として説かれた語詞、築島裕博士の言われる和文語²⁾が認められる。この和文語が、仏説太子須陀拏経平安中期点では、会話部分の文章に偏つて出現している。この事実は、稿者が、小林博士の指導される国語学演習において会話文、地の文の文体差を念頭に発表したものである³⁾が、小林解説では、多角的視点から用例を増やされ、分類されて、詳細を示されている。

本稿は、これを承けて、石山寺藏仏説太子須陀拏経平安中期点の漢文訓読語の更なる文体分析を行おうとするものである。特に、仏説太子須陀拏経は、原漢文が本来的に説話性が強く、かかる漢文を如何に訓読したのかを、文体分析を通じて考えてみようとするものである。

一、会話部分に偏る用語に就いて

一資料中の訓読語に文体差が有るとした場合、「どのような文体カテゴリーを設定して文体分析を行なうのか」、また、「どうであれば文体差として認めうるか」と言った基本的問題がある。稿者は、一漢文訓読語資料（一訓点資料）の内部に、文体差を認めようとした時、カテゴリーとしてどのような単位を設定して、一資料を分解し整理・記述するのか。どのような言語事象を捉えて「文体差の分析」を行なうべきかの課題について、些かの試案を公にして来た。⁴

この旧稿において設定した指標と成る文体分析の分類カテゴリーは、会話部分（「偈」を含む）と地の文部分（上記の会話部分以外）とであった。この根拠については、旧稿に触れたが、「会話部分の訓読語文体」対「地の部分の訓読語文体」として、漢文訓読語と言う文章中の「会話語」対「文章語」の類型として捉えてみようとした。言語事象として取り上げたのは、文末表現―旧稿では、最文末一語の計量的集計を行った―であった。その試行の結果、会話語の文末表現は、地の文の文末表現に比較して多様で、活用語のムード、モダリティー表現に関して豊かな文末を形成していることが判明した。これに対して、地の文の文末は、ムードでは、活用語終止形による終止法が中心で、モダリティーの表現も平叙が中心の文末を取っていることが判明した。

ただし、旧稿における文体差についてのかかる描像には、以下のような問題が横たわるものであることも明らかに成って来た。

- 一、会話最文末と地の文最文末の集合としての整理においては、地の文の文末の出現事象は、すべて、会話文の集合中に含み込まれてしまう。
- 二、便宜的に最文末一語の集計を行ったが、文末分節全体の分析記述が必要である。

三、地の文の文末に多くの用例が出現する助動詞「き」の分布を解釈しようとするれば、「会話文（会話語）⇕地の文（文章語）」の対立だけでは解釈が出来ない。取り上げた「法華経」の訓読語を、別の指標「法

華経を見立てた）説話の表現」としての―入れ子型の―方法の問題が関わってくる。即ち、文体分析を行った際の指標が異なる場合、いかに統合して抽象化するかの問題が発掘された。

右の箇条書きの二と三とは、将来的問題で、方法論の開拓が必要な課題であると思われるので、ここでは、記して注意を喚起しておくに過ぎないが、一の問題は、現在試行中の方法が、真に、文体差の記述と成っているかの問題で、少しく、解説を行う。

築島裕博士が実践して、単語レベルに至るまでの記述をされた、「訓読語⇕和文語」の語彙的差は、訓読特有語⇕共通語⇕和文特有語の集合が存在する語彙分類で、この語彙分類は、直接的に訓読語⇕和文語の文体差を記述したものである。即ち、「ハナハダ⇕いと」とか、助動詞「シム⇕す・さす」などの示す対立は、訓読語の用語と和文語の用語が、集合上重ならない事態を多く示し、正に、文体的な言語体系差と考えても良かった。しかし、稿者の旧稿における試行は、現段階までの記述では、地の文の文末のバリエーションは、完全に会話文末のバリエーションに含み込まれるものであった。疑問としては、会話文末の表現体系、即、会話文の文体と、それに対して立した異文体として、地の文文末の表現体系を措定することができない、と言うものである。

稿者の立場は、近年「訓読語基調」と言う概念で、訓読語を捉え直すようとして試行を繰り返している所であるが、文体基調が会話文と地の文とで異なつた印象（この印象批評的な感覚に通じるものを「訓読語基調」として概念化し、客観的に論じようと試みている）を生じていたと見ても良いのではないかと考えている。つまり、地の文の文末表現は、平叙での単調な表現が中心である。それに対して、会話文の文末表現は、命令法や連体形終止法、疑問、反語、詠嘆等々の表現が現れて、当時の共時態において表現の表情が豊かであると言う印象を持たれていたものであったと推論して、一漢文訓読語資料中に文体的差が存したと認めようとするものである。

仏説太子須陀拏經平安中期点における地の文と会話文（小林博士は、厳密な定義をされていないが、本稿においては、釈迦が会話として語る須陀拏太子説話の発話の中において、釈迦の語りの地の文を「地の文」と言い、直接会話として引用された会話を、「会話部分」と言う。以下特に断らない限り同様の用語を使用する）との文体差を、語彙的な問題として、小林解説に取り上げられた語彙から数対を以下に記述する。但し、いずれも、対象語詞の全用例数が多くはないことを断つておく。

「ハナハダ」対「いと」については、以下の確例が認められる。

- 1、「諾（ふ）こと大ト「イ、大夕」善シ。」（74・会話・太子）
- 2、「我 大夕貧窮ナレハ太子に從りて乞丐する所有（り）とは欲ふ。」（269・会話・婆羅門）
- 3、「太た善（き）なり。」（355・会話・天王釋）
- 4、鳧雁鵠鸚翡翠鴛鴦異類甚た衆し。（191・地）

「ハナハダ」の確例は右の四例で、用例1から用例3までの3例は、会話文中での使用である。「いと」は、四例の確例があるが、その内の一例は、例1である。残りの三例共に「大」字の訓で、

- 5、「寒（け）れは「則」大に寒く熱（け）れは「則」大ト熱し。」（131・会話・太子）
- 6、「汝能く爾ら者大ト善し「也」」（144・会話・太子）
- 7、「又大ト飢渴（し）たり」（266・会話・婆羅門）

の四例で、太子の会話中の「大」字の訓三例と、婆羅門の会話中の「大」字の訓一例が認められる。この語に関しては、会話中に「ハナハダ」「いと」共に現れ、地の文では、「ハナハダ」のみが現れる。即ち、会話中の表現性が高く、地の文はそれに包み込まれる関係となる。

- 8、「カクノゴトシ」対「かかる」では、「カクノゴトシ」の確例は、五例あって、「太子是（の）如く自（ら）恣に布施す。」（85・会話・臣）
- 9、「菩薩すら檀波羅蜜（を）行（し）たまふこと布施是（の）如し。」

(440・会話・仏)

10、是（の）如くイフコト三（ひ）に至る。（272・地）

11、是（の）如くして三（ひ）に至れとも太子應（へ）不（す）。（321・地）

12、使者還（り）て是（の）如く白（す）。（406・地）

右の確例以外とは、「此（の）如（き）を（366）」、「是（の）如（く）して（437）」、「是（の）如（し）と（430）」、「是（の）如（き）を（94・147・422）」の六例を指す。

これに対して、「かかる」は、確例が三例あって、

13、「今復（た）遭ひて此ルこと（に）値へり。」（286・会話・両児）

14、「我數、婆羅門（を）見（る）に曾（タニモ是ル輩をは見未（す））」（144・会話・両児）

15、「世世に復（た）是ルこと（に）値遇すること莫らしめ（よ）」（288・会話・両児）

と現れる。漢文訓読語たる「カクノゴトシ」は、地の文、会話文を通じて現れるが、和文語「かかる」は、会話のみに出現する。この事象も、会話中の表現性が高く、地の文の表現は、それに包み込まれる。

「シバラク」対「しばし」の対は、

16、「願（はくは）小（ク相避（り）て過（き）去（る）こと得使（めよ）」（305・会話・妃）

17、「且（く）當（に）此（に）住（り）て水の減セ（む）を須（ち）て乃（ち）度らむ。」（182・会話・妃）

18、「且（く）止（め）（よ）」（325・会話・太子）

19、「此には暇（ク止（り）ヌ可シヤ不（や）」（178・会話・妃）と出現する。これに対して「しばし」は、二例が確認される。

20、「我（適（シ）水取（り）て年少の曹（輩）共に形（タカ）カヘテ我（を）調（り）咲（ふ）」（231・会話・婦）

21、太子（適（シ）メテ山（中）に宿（り）たまふときには空（シカ）シ池（には）皆（な）泉（の）水生（ツ）」（214・地）

右の如き分布を示し、漢文訓読語「シバラク」は会話中に、和文語の二例は、会話中と地の文に現れる。表現性の意味では、会話に二語形出現して、地の文では一語形であるが、地の文に現れるのは、和文語形「しばし」である。用例の絶対数が少ないのではあるが、右の対照とは性質上は逆転した対応関係であると認めねばならない。ただ、かかる事象の用例数は少ない。

平安後半期の共時態を問題とされた「漢文訓読語Ⅱ文章語」、「和文語Ⅱ日常会話語」とされた築島裕博士のパラダイムを、漢文訓読語史の側から批判できる糸口になるかも知れないとは思いますが、後日に期することとする。

「イタシ（痛覚に関わる意味）」対「いたく（程度の甚だしい意）」では、
22、「我は遠方従り來れば身擧（け）て皆（な）痛し。」（178・会話・婆羅門）の一例は、漢文の用字と対応して、「痛覚に関わる表現」であるが、会話中に存する。和文語の「いたく」は、

- 23、「汝正（し）く坐ルときには布施を太（イ）劇クシテ我が國の藏を空（ウツ）シクナシ我が適を却（ク）クル。「之」寶をも失（ひ）つ。」（110・会話・王）
24、「我は布施用（て）太（イ）劇ク國の藏を空（ウツ）虚（ウツ）シ健（コ）キ白象（以（て））怨家（に）丐（へ）與（へ）タレハ（以下略）」（123・会話・太子）
25、「太子須陀拏トイフ坐（イ）シテ布施大（イ）劇クするか故に父の王に徒（ウツ）サレテ」（236・会話・婦）

と会話部分のみに現れて、会話部分の表現性の豊かさを物語るものと解釈できよう。ただし、右の例1から例25を通じて、各事象において、原漢文の用字の影響の問題を無視できないと考えられるが、この問題については複雑な状況をより単純に整理する必要があつて、これも後考に俟ちたい。

この他に、小林解説では、助動詞「けむ」「らむ」「けり」、接続助詞「ものを」、副助詞「し」の会話専用の指摘があるが、稿者は、微力にして、この表現に対応する漢文訓読語表現を特定できないので、ここでは措かざるを得ない。また、「オゴソカナリ」対「いかめし」の対では、漢文訓読語形と言われる「オゴソカナリ」の用例が、仏説太子須陀拏經平安中期点に確

認されない。

以上、確例の用例数が多くはないが、会話部分における表現は、所謂漢文訓読語と言われるものも、和文語と言われるものも、その出現を確認されるが、地の文においては、漢文訓読語形か和文語形のどちらか一方のみが、が確認されて、会話部分に比べて、文体的には表現の幅が狭いと認められる。

さらに付言しておきたいことは、文選読みの出現傾向で、結論的に言えば、この訓読語法（訓読語表現）は、地の文にしか認められない。その意味では、会話文との文体差の例として掲げても良からう。文選読みは状態・形状の形容の「意味」を担つて、動詞として現れる。文選読みの出現は、

- 26、王聞（き）て愕（イ）然とマウオトロイたまふ。（83・地）
27、鼻は正（し）く鼻（鼻）とヒラメリ。（225・地）
28、脚復（た）了戻とモトリ頭復（た）貶（カ）シ禿ナルこと狀なる類の鬼に似たり。（226・地）

の三例で、用例数は少ないが、いずれも、地の文に出現する。かかる意味では、会話文の表現性に、地の文の表現が完全に含み込まれるという集合関係でないことが実証される。飛躍するかも知れぬが、一訓読語資料における会話文対地の文の文体差は、平安時代中期に、同一の漢文訓読語資料の内部においてと言う限定付きであるが、「言」と「文」とが不一致であつたことを物語る結果ではなからうか。

二、仏説太子須陀拏經平安中期点の文章構造

先に断らねばならないことがある。本資料は、尾題前の空行一行を計数に入れて、総行数四四二行の資料である。ただし、巻頭より内題を含めて三六行が、後世の補写であつて、院政期の石山寺朗澄筆であると推定される。この補写部分は、無点である。

漢文訓読語研究では、文体研究に限らず、語彙、音韻、文法等の訓読語

の分析を行う際には、完存であることが望ましい。漢文の完存であっても、加が必要であるのは断るまでもない。

漢文訓読語の文体分析に、巻首が欠けることによって生じる不利は、説話の入れ子型の枠構造が、全体として把握できないからである。石山寺蔵仏説太子須陀拏経は、巻頭補写部分を含めて尾題まで、経の全体が、以下の構造を採る。

(行頭のアラビア数字は原本行教)

- 1 佛説太子須陀拏経
- 2 聞如是。『一時佛在舍衛國祇洹精舍。阿難部
- 3 祇阿藍時與無鞅數比丘比丘尼優婆塞優
- 4 婆夷俱在四部弟子。中央坐時、佛微笑、口中
- 5 五色光出。阿難從坐起、愍衣服叉手長跪、
- 6 白佛言「我侍佛以來廿餘年。未嘗見佛咲如
- 7 今日也。今佛爲過去當來今現在佛乎。獨當
- 8 有意願聞之。」佛語阿難「我亦不念去來今
- 9 佛也。我自念過去无鞅阿僧祇劫行檀波
- 10 羅蜜事耳。」
- 11 阿難問佛言「何等爲行檀波羅蜜事。」佛言
- 12 『往昔過去不可計劫時有大國名爲葉波 (句読点は稿者による)
- (中略・須陀拏太子説話部)
- 429 布施に休(ま)不自(ら)佛得(る)ことを致せり。』
- 430 佛阿難(に)告(けたまはく)「我(か)宿(の命)二行(せし)所の布
- 431 施(は)我(か)身(は)是也。

(中略)

- 439 菩薩すら檀波羅蜜行(し)たまふこと布施
- 440 是(の)如(し)。
- 441 (空行一行)
- 442 太子須陀拏経一卷(尾題)

と記述される。この巻頭の構造をどう捉えていたのかは、訓点がないので実証できないが、漢文に従えば、「聞如是」によって、伝聞の語りであることを示して最も外側の大枠の設定をし、続いて、2行目の「一時佛在」以下「祇洹精舍」においての場では、阿難と仏との問答が語られる。この阿難と仏との問答の場は、最も外側の「聞如是」の構造の内側に、入れ子型に設定される。左にも確認するように、この阿難と仏との問答の遣り取りの、仏が答として説き語る言葉によって須陀拏説話が語られ、阿難と仏の問答の場の内側に、更に、須陀拏太子説話が、入れ子型構造で存している。更に、この須陀拏太子説話の語りの中にも、須陀拏説話の時間進行から逸脱して、過去の逸話が引かれるなどして更なる入れ子型を構築する。

さて、話題を上記の本文の問題に戻すが、12行目の「往昔過去不可計劫時」以下は、「佛言」として仏説、釈迦の説いた形を取った「太子須陀拏」説話が展開すると解釈してよからう。ただ、問題は、この説話の語りに入る場の設定がどんな用語によって成されているのかは、確認のしようがないことである。即ち、入れ子型の説話の語りにもなつて、どのような語―助詞、助動詞を中心とした語、また、待遇法―が読添えられて形を整えていたのかは、残念ながら知る由もないのである。稿者は、妙法蓮華経を説話漢文と見立てて、文体分析の方法論を論じているが、最も外枠の入れ子型構造の文体分析、及び、仏が説き、阿難と問答する場の設定の文体構造については、加がないので、本稿では最初から放棄しなくてはならない。

平安中期点は、第37行目から加点が存する。城門外に出て還つた太子が

愁憂の様子を見せるので、父・大王がその理由を問う、その大王と太子との問答の途中から加添されている。即ち、本稿の検討対象は、第37行目以降とせざるを得ないことを、まず、断っておきたい。

この問題が何に波及するかと言えば、仏説太子須陀拏経に対する構造把握を基にした、訓読者の訓読姿勢の問題に繋がる。

仏説太子須陀拏経平安中期点の12行目以降の大半は、仏が説き語る須陀拏太子説話なのであるが、巻末の430行目以降の11行ほどは、一度、太子須陀拏説話の説話世界の場合から、仏と阿難の問答の場に戻って、仏が阿難に告げた会話が記述される。

12行目から429行目まで、仏によって一気に語られた須陀拏太子説話が、本生譚であったことを仏が語るもので、阿難との対話であったことを示して、須陀拏太子説話の世界から巻頭に設定された仏と阿難の対話であった場合と一つ外枠の構造に視座を後退させて仏説太子須陀拏経平安中期点の本文が終わる。巻頭11行目までの部分の場に戻る状況を示して、謂わば、説話を支える場の、入れ子型の設定を行っているが、冒頭部分の「聞如是」に対応する漢文はなくて、最も外側の入れ子型は完成されていないことをまず、確認しておきたい。

即ち、「聞如是」の最も外側、主語が「我」であろうと推定される最も外側の枠組みの内側に、仏と阿難との対話の場の枠組みが設定され、更に、須陀拏太子の説話世界の場合は、その仏の会話の中に設定される入れ子型構造を採る。更に言えば、仏説の須陀拏太子説話の内部にも、登場人物の対話に直接会話が引かれる。更にまた、その登場人物の、須陀拏太子の現在から時間を遡った過去の逸話―テンスの助動詞の使用が認められる場―が引用される更なる入れ子型構造を認めることができる。

この太子須陀拏経の文章構造把握が、訓読者の言語の問題に波及するのは、須陀拏太子説話の世界が、仏によって語られた会話の世界だと捉えるのか、あるいは、須陀拏太子の説話世界の中に、更に登場人物間の対話が

入れ子型に組み込まれたもので、仏の語りの世界の内部を、更に入れ子型世界がある、即ち、複層的な「語り」の世界があると認識して訓読者が訓読するのでは、訓読文体の差が生まれる可能性が充分にある。即ち、仏の語りの須陀拏太子説話部分全体を、仏の会話（全部が会話語的である）と認めて訓読するのか、あるいは、語りの形を採ってはいるが、須陀拏太子説話部分は地の文（文章語的）に支えられて、会話部分である対話（会話語的）が挿入されていると認識して訓読するかでは、自ずから、訓読文の表現性が異なつてこよう。

こうした訓読者の訓読対象資料の構造把握の違いが、言語に影響を及ぼしうると言う研究の視座は、いまままで形成されたことがなかった。この問題を考えようとするには、石山寺蔵太子須陀拏経平安中期点の巻頭が、36行補写である事実は、如何とも越えがたい限界を示していることになる。

次節から石山寺蔵太子須陀拏経平安中期点に現れる漢文訓読語の具体的な記述に入るが、石山寺蔵太子須陀拏経平安中期点の扱いとして、429行目までの仏説による須陀拏太子説話部分と、430行目以降の仏と阿難の対話部分とは切り離して検討することとする。また、先にも注したが、本稿内の用語としては、「会話文」とか、「地の文」とかの用語を用いる。しかし、断らない場合は、共に、仏説の太子須陀拏説話内部の直接会話引用部分を「会話文」と言い、その会話の引用を支える一つ外側の構造―仏の会話内にある―を、太子須陀拏説話の話柄を支える意味で、「地の文」と称することにする。

430行目以降は、事象の処理上、右とは切り離し、仏と阿難の対話の場の叙述を「巻末の地の文」と言い、太子須陀拏説話が過去世の釈迦の本生譚であることを、仏が語る発言部分を「巻末の会話部（分）」と称することに

三、仏説太子須陀拏経平安中期点の文末表現

稿者は、一資料体内の文体差の検討、また、各資料間の文体的な距離を測ることを目的として、中院僧正点の初期資料の文末表現体系を指標として試論をものしたことがある。それらの稿で採った方法は、各資料の文末表現に注目したものであった。日本語表現における文末の重要性は、各方面から指摘されるところである。旧稿に採った方法は、文末分節の最文末一語の集計整理であった。旧稿に扱った中院僧正点資料は、仮名加点は濃くはないものの、幸いに、文末表現をかなりの確度で特定できる資料であることも実証した。ただし、理論的に扱った部分もあつて、諸種の文末最一語が、有標（訓点があつて、活用形や再読の二度読みなどを明確に指示したもの）で特定できる箇所も多いが、無標（語形を特定できる訓点の加點がない場合）の所もあつて、その場合は、特に、活用語については、活用語の終止形・終止法であると推定しての整理であつた。論考の手続きとして、文末表現の有標、無標を右の如く理論化して帰納しても、矛盾はないことを確認した。斯かる推論を演繹的に適用して、文末の帰納整理を行った。演繹的推論を経たことは、右の如くであるが、漢文訓読語史研究の学界においては、演繹法が理解をされていない場合がある。あるいは、迷信とも言うべき、研究者の無自覚、無知な演繹法への忌避がある。

即ち、訓点資料は、一資料の総ての音節を特定できる情報を与える資料の存在は、殆ど、望みがない。無標の場合の訓読語は、演繹的推論によつて研究者が決定しているという自覚に欠けている。例えば、「將」「當」「未」などの再読字の分析は、「単読である有標」あるいは「再読の確例」によつて他は、演繹的に推読される。平安初期の訓読語の例も、再読の表記がない事をもって、再読が成立していなかったと演繹的に考えられている。残存資料が偶然性のもとに伝存しているとすると、平安初期再読字未成立論は、無標の箇所も単読であつたと言う演繹の産物である。また、助字の訓読についてでも良い。一資料中に、有標の場合、「則」「則」等と確例が有つた場合は、演繹的解釈は複数存する。有標の確例があることを以て、一資

料中の「則」字は全て直読であつたと結論して、無標箇所も演繹的に直読する場合がある。この論理も演繹法による。

これとは別の立場によつては、有標の「則」などある箇所は直読するが、無標の場合は不読であつたと推論する場合がある。この判断も演繹的推論を基にしている。

実は、ある共時態でどのような加點法が採られていたのかと言つた、基礎的な表記法の検討さえ、現状では論じられた例を知らない。表記研究も、ヲコト点や片仮名字体の共時的差は論ぜられてはいるが、訓点の加點方法・表記法の実態における言語表現能力の記述については、共時体間の比較をされた論も、管見には入つては居ない。訓点資料研究の方法論の深化を急ぐべきだとする稿者の主張の根拠も、こんな所にある。種々の立場が表明されて然るべき言語事象についても、反論対立的な価値を示して並立しても良い筈の論が、多くは生産されては居ないし、公にされてもいない。

本節では、かかる文末体系を指標とした文体分析を、仏説太子須陀拏經平安中期点の文体分析に使用しようとするものである。しかし、文末の語形の特定が、仏説太子須陀拏經平安中期点においては、いままで稿者が取り上げて試論を展開した資料と比較して、容易成らざる部分があることを率直に認めねばならない。抛つて、本節での最文末一語の計量的集計は、以下の方針に従つて、演繹的に進めることとする。いずれも、文末語形の無標の場合の方針である。

一、最文末分節が動詞形容詞等自立語一語の活用語そのもの、又は、助動詞で漢文に対応漢字があつて無標の場合（可、應、令等）は、終止形・終止法として集計することを原則とする。

一、原漢文の文末の構文・用字が同様で、他に有標の確例を認める場合には、便宜的にこれに準ずる。

例、大王當（に）聽（さ）見や不（や）（37）

一、異読の併存する場合は、加點位置は問わず、仮名書訓点に従う。

なお、異読形は参考のために、別途、これを表末に集計して示す。
 一、表中の（ ）内の数字は、推読の計数をあらわす。

右に従って、最文末一語の語形を決定することとする。計数的な処理の結果は、以下の通りである。

「表1」 仏説太子須陀拏經平安中期点の文末表現

○須陀拏太子説話部分の計数

	会話部分の文末	地の文部分の文末
動詞		
終止形	32 (10)	111 (31)
連体形 (疑問反語)	10 (2)	0
命令形	14	0
形容詞		
終止形	5 (2)	4
連体形 (疑問)	1	0
「なし」終止形	10 (5)	5
命令形	3 (1)	0
補助動詞		
「たまふ」終止形	8	21
連体形 (疑問)	1	0
命令形	19	0
「たてまつる」終止形	2	7
命令形	1	0
助動詞		
「る」終止形	1	0
終止形	2	6
「しむ」終止形	3	0
命令形	3	0
「ぎ」終止形	12 (2)	2
終止形	3	0
「けり」終止形	3	0
終止形	18	6
「つ」終止形	1	0
連体形 (疑問)	10 (1)	34
終止形	1	0
「ぬ」連体形 (疑問)	1	0

命令形	3	0
「たり」終止形	9	2 (1)
終止形	36 (1)	0
「なり」(指定)終止形	1	0
連体形 (疑問)	1	5
「たり」(指定)終止形	1	0
「なり」(伝聞)	3	0
「ごとし」終止形	5 (2)	0
終止形	15 (8)	0
「べし」終止形	5	0
連体形 (疑問反語)	1	0
「らむ」終止形	1	0
終止形	20 (4)	0
「けむ」連体形 (疑問)	1	0
終止形	10 (1)	0
連体形 (疑問反語)	15 (2)	0
「じ」終止形	1	0
連体形 (疑問)	18 (11)	11 (4)
終止形	1	0
「ず」連体形 (疑問)	1	0
命令形	5 (1)	0
「あらず」終止形	1	0
「あらし」終止形	1	0
助詞		
「と」(会話引用格助詞)	2	58
「や」(疑問反語)	14	0
(詠嘆)	7	0
「をや」(詠嘆)	2	0
「不や」	8 (1)	0
「か」	1	0
「ぞ」(反語)	10	0
「のみ」	4 (6)	0

名詞				
「こと」(会話引用)	0	3	1	1
ク語法				
「ゆるに」	0	3	85	1
			(46)	
○巻末の対話部分の計数				
助動詞				
「き」 終止形	1		0	0
「なり」(指定) 終止形	(11)		0	0
「ことし」 終止形	1	(1)	0	0
「べし」 終止形	1		0	0
助詞				
「と」(会話引用格助詞)	0		1	1
ク語法				
	0		(1)	
計	374	(76)	計	365
	文		(83)	文
			総文数	898
			文	

※異読に拠つて右に含まれない文末

動詞終止形(会話1、地1)、「ぬ」終止形(地1)、「ず」終止形(会話)、「じ」終止形(会話1)、「ぞ」(地1)、「や」反語(会話1)

右表1の掲載順とは前後するが、巻末の対話の場合、特に、仏の会話部分は、言語量としては多いものではない。推読に依るものであるが、助動詞「なり」の頻出が指摘される。この巻末の11行ほどは、それまでの須陀摩太子説話が、釈迦の本生譚であることを解説した部分で、謂わば、注釈的文体とも言えるものであろう。

仏説である須陀摩太子説話部分を分類して計数を掲げたが、地の文は、動詞・形容詞・助動詞の終止形・終止法による平叙と、会話引用の形式「ク語法『・・・』格助詞」との出現で、殆どの例を占める。

一方、会話部分は、文末の形式が多様で、平叙の終止はもとより、疑問・反語表現の連体形終止、命令形による命令法などのムードに関して多様

であるし、助動詞、助詞の異なりも多様さを示す。地の文の文末表現に比べて、会話内に、更に会話を引用する入れ子型は多くはなくて、「ク語法『・・・』格助詞と」の用例数が、地の文に比べて極めて少ない。

右の会話文部分と地の文部分の文体的な言語の質的な差異は、平叙によって淡々と説く地の文に対して、その地の文に支えられて変化に富んだ会話部分の表現が展開していると捉えても良からう。これを出来上がった訓読文の文体基調の性格差として記述して良からうと判断するが、かかる差異は、独り日本語としての訓読語にのみ原因がある訳ではない。即ち、訓読語成立以前に原漢文の側に既にこのような文体差を示す要因があったと見なければならぬところが当然のことである。問題は、そうした漢文訓読文成立の中国語文たる要因と、日本語側の訓読語に存する独自の要因とがどのように絡み合っているかを解き明かす必要があるように感じる。

四、仏説太子須陀摩経平安中期点の読添語の整理

本節においては、前節末の課題に関連して、試論を掲げてみる。検討対象は釈迦の会話部分で、須陀摩説話部分37行目から429行目だけに限定して検討を加える。検討対象は、読添語についてである。読添語については、文中、文末を問わないこととする。表2については、以下の様な作業手順で集約したものを掲げる。

以下には読添語を取り上げるが、確例のみに限定する。それ故にまた、有無だけを示した情報の集約法を採る。集計対象の品詞は問わないが、日本語の助詞助動詞にあたるもので、漢字と対応して訓読された場合は、形式上、読添語とは異なるものとして扱う。

本節に意図するところは、前節までに、文末表現(最文末一語)のみを取り上げて検討を加えたが、最文末一語の集計方法が、文体分析に有効性を持つものか否かの検証を行うことにある。

名詞	たてまつる	有		有
	こと	有		有
	とき	有	有	有
	もの	有	〇	有
	計	52種	計	31種

諄くなるが、右の表2と、先の表1とを比較すると、語種の出入りが存する。それは、表2においては、読添語に限定しての集計であるので、文中例を取り上げているためである。

先ず、総語種の数として、会話部分には52語現れるのに対して、地の文では、31語しか現れてはいない。従って、単純に数量として会話部分の語種数が21語多いこととなる。総量という概観でしかないが、この点からは、先に、最文末の表現体系を整理して得た傾向と同一である。会話文における表現性が、地の文におけるよりも高いとみる見解を裏付けるものであろう。

表1に見えなかった語としては、格助詞の類がある。会話引用の「と」は表1の集計に現れるが、その他のものが表1には見えない。また、接続助詞の類も、表1には見えないが、これらは文中に読み添えられた構文上の関係を示す助詞類である。

格助詞においては、集計上、「もて」が会話部分に特有であると集計されるが、「もちて」は、会話文・地の文にも共に現れて、会話文と地の文との差は殆どないと見ることができよう。あるいは、語形の同定の問題があるが、会話文中において形式が豊かである。

接続助詞は、出入りがある。「とも」、「ものを」は会話部分に特有で、接続助詞「に」は、地の文に特有である。しかし、用例数がいずれも五例以下であるので、必ずしも、分布傾向を云々できないかも知れない。

助詞も、係助詞・終助詞・副助詞においては、分布に偏りがある。会話文・地の文に共に使われる読添語は、係助詞「は」のみであって、これら添意

の助詞とされるものは、会話文に偏って読み添えられて、会話文の表現性の豊かさを支えていることを物語るものであろう。

助動詞は、ヴォイス、テンス・アスペクトの助動詞には、基本的には、会話文と地の文での出現差はないとみとめられよう。ただし、表1の解釈でも触れたように、テンスの助動詞に関して、地の文では「き」のみの出現であるが、会話には三例と僅かながら「けり」の出現が認められる。

大きく異なるのは、モダリティー表現に連なる、所謂、伝聞推定の助動詞、推量の助動詞群で、これらは会話文に特有の読添語であって、地の文には現れない。このことは先にも確認した如く、発話者の心的な態度を示すニュアンスの表現に関するものであって、会話文において、その表現性が豊かであると結論されよう。

動詞の読添語に見られる語は、「あり」以下の八語が存する。動詞読添語を一覧にするに、会話部分と地の部分とに出入りが認められる。ただし、自立語たる動詞の読添語は、それ自体の出現数が限られたものである。なぜならば、訓読文における動詞のような自立語は、多くは、原漢文の漢字の訓として現れるのが普通であろう。名詞も含めて、形式的な語が読添語中に現れる。平安初期から院政期・鎌倉時代までの通時的な変化もあり得ることであろうから、この読添語における動詞の出現は、これを特に論じてみる必要がある。石山寺藏仏説太子須陀拏經平安中期点においては、会話特有の「あたる」、「います」、「なす」と、地の文に特有の「なる」、「もうす」の出現から、今、即座に会話部分と地の文部分の文体差、表現性の違いを論ずることはできないのではないかと判断される。

本資料には、待遇表現が豊かで、補助動詞の「たまふ」と「たてまつる」とは、会話部分、地の文部分共によく現れる読添語である。

名詞の読添語は、「こと」、「とき」の形式名詞が、会話部分、地の文部分共によく現れる。会話部分に特有の「もの」は、読添語としては計三例が会話部分に認められるが、用例数自体が寡少であって会話部分・地の文部

分の文体差を論じる切ることができないと判断される。

以上の読添語の状況の記述によって、先の表1の文末部最文末一語を取り上げて、その体系を検討した結果と符合するものであると考えられ、最文末一語の分析が、文体差の傾向を捉えうる方法として妥当であると言うことの傍証となるであろう。

おわりに

以上、石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点を例として、一資料中に現れる訓読語の文体差についての言及を行ってきた。従来、平安時代和文の研究においては、地の文（双紙地）と会話部分の比較検討が盛んに行われてきた研究史があったものと認識している。その研究史の評価について、稿者は、明確な意見を持つものではないが、研究上の着想による仮説の検証が大きな動態を掴むべき成果を上げてきたかと言えば、十分なものではなかったように感じる。確かに、差異が明らかにされて来たことを否定するものではないが、地の文と会話部分との文体差に、体系的な視点から歴然とした表現性の差が認められてきたかと言えば、必ずしもそうでは無かったのではないかと感じられる。

論中にも記した如く、石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点においては、淡々と綴られる地の文の表現に対して、その地の文に支えられた会話文は、表現性豊かに訓読されたと認めても良いのではなからうか。ここに文体差を認めると同時に、多くの平叙文によって地の文らしさを表現された淡々と説明的な訓読語の基調と、表現性豊かな会話文らしい訓読語の表現基調があったとみて良いのではなからうか。和文における地の文（双紙地）の表現と会話部分の表現の差に比べて、明らかな差異を認めても良いように思われる。それは、些か粗っぽい類推的転化であるが、石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点における訓読語の「言」と「文」の差であると言い換えても良いかも知れない。

また、この視点は、第一節の終わりに触れたが、築島裕博士が構築された和文語と漢文訓読語の語彙の差異を、本稿の検討に当て嵌めた際、漢文訓読語の内部という言語世界に限定されるが、「言」と「文」との差をもって、語彙的な面から、更に進んでは、文体的な面からの検討、即ち、地の文と会話文の表現を丹念に比較すれば、理論的には、築島博士の描かれた姿とは、異なつた平安時代の訓点資料の語彙の姿が把握できる道があると思われる。ただし、その実証のためには、本稿に取り上げたような説話漢文を訓読した訓読語資料を、論証可能な言語量が確保されるほどに発掘をしなくてはならないだろう。しかし、現在、稿者が調査することのできた資料においては、かかる試行が可能なるほどに十分な量の訓点資料を得てはいない。今後の発掘に委ねねばならない。告白を許されるとすれば、本稿のような一資料中の文体差を求めようとする視点に特化しての視角では、稿者は訓点資料を見て来なかった。目録等の検索から始めて、資料の存在の把握、調査・移点から確認作業を再出発する必要がある。

平安時代の訓点資料における語彙研究、また、文体研究の新たな可能性にはたどり着けたように思うが、残された課題があまりにも多い状況である。

注

- 1、築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』（平成八年五月、汲古書院）第二章第八節。
- 2、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（昭和三十八年三月、東京大学出版会）。
- 3、小林芳規・松本光隆・鈴木恵「石山寺蔵仏説太子須陀拏経平安中期点」（『訓点語と訓点資料』第七十一・七十二輯合併号、昭和五十九年五月）小林解説、三〇頁。
- 4、拙稿「高山寺蔵金剛頂瑜伽経寛治二年点の訓読法——訓点資料における文末表現体系記述の試み——」（『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集 平成二十一年度』、

平成二十二年三月)。

拙稿「中院僧正明算の訓読語(上)——宗派流派内の訓読語体系の記述を巡って——」(『広島大学大学院文学研究科論集』第七〇巻、平成二十二年十二月)。

拙稿「中院僧正明算の訓読語(下)——妙法蓮華經明算点の文末表現——」(『広島大学大学院文学研究科論集』第七十一巻、平成二十三年十二月) 掲載予定。

- 5、「訓読語基調」なる概念を設定しようとしている背景には、仏書漢文訓読語における「漢文訓読語」を捉えようとした場合、従来の概念的な処理では、本質が捉えられないものであると考えている。即ち、仏書の訓読語の系統的な展開を筋として捉えようとすると、同文比較法などにおいての異なりが多様すぎる。つまり、異なり全体を体系化して、本質的差を求めようとするには、状況が複雑すぎて体系化できない憾みがある(漢籍における同文比較法も、限界のある方法で、果たして、博士家各家々の訓読法を体系的に抽象化して描き得ているかということにも、稿者は疑問を抱いている[拙稿「漢文訓読語史における同文比較法の陥穽」(『表現技術研究』第七号、平成二十四年三月掲載予定)]。この事態は、当時の仏書訓読語の訓読生活の本質に繋がっているものと予測しており、ある宗派中のある流派の訓読語が、例えば祖師から伝承性強く伝えられるものであったと捉え切つて良いかと言つた疑問に通じている。訓読語の詳細な共時的記述を試みようとするれば、特定個人の訓読資料に絞って行かなければ、訓読語事象が記述できないと考えている。あるいは、それさえも、不可能かも知れない。院政期、あるいは、鎌倉時代に至つてさえ、白文の漢文を所謂、祖点として下点した例のあることを総合すれば、無批判に、平安後期以降は、伝承的なものであったと全体を捉えることは不可能であると結論せざるを得ない。確かに、移点の実態はあつたが、それが全てではないと見るべきである。

稿者の考えている「訓読語基調」とは、緩やかな体系性を想定した、言語印象のようなものの抛り所と成つている事象記述を指そうとしていのである。即ち、仏書訓読語の場合、「一一派の訓読語」と言つた印象を、客観的に記述できないかとの発想から試行を繰り返している。

- 6、築島裕博士は、「漢文訓読語」対「和文語」の語彙的対立を体系的に記述されて、「両体系の性格を、「文章語」と「日常会話語」の対立であると捉えられた。本稿にも略述したが、稿者の漢文訓読語分析の視座は、比較的緩やかな「訓読語基調」という概念で捉え直そうと言ふところに置いている。その観点からすれば、会話、地の文の両方に出現する共通語は、広く漢文全体に互つての「漢文訓読語基調語」

として位置づけられる語詞であろうし、会話専用の語は、漢文訓読語でも会話に限つて出現するという偏りを見せる「会話専用語」と言うことになる。かかる新たな概念を適用して、パラダイムを組み直し、当時の概念的枠組みに近づくことが、理論的には可能であろうと考える。ただし、実証的な実践的記述は、後に委ねねばならない。

- 7、拙稿「中院僧正明算の訓読語(下)——妙法蓮華經明算点の文末表現——」(『広島大学大学院文学研究科論集』第七十一巻、平成二十三年十二月) 掲載予定。
右の拙稿において、文体的視点から、過去の助動詞「き」「けり」の出現は、説話構造と関わることを論じている。

8、注4に掲げた三文献。

- 9、拙稿「中院僧正明算の訓読語(上)——宗派流派内の訓読語体系の記述を巡って——」(『広島大学大学院文学研究科論集』第七〇巻、平成二十二年十二月)。
稿者の理論的な仮設に拠つて、整理集計したもので、当然ながら、別の理論的根拠をもつて最文末一語の認定が成される場合は、論者によつて、計数等の基礎的情報収集の結果が異なることは、十二分に予想される。

- 10、拙稿「漢文訓読語史における同文比較法の陥穽」(『表現技術研究』第七号、平成二十四年三月掲載予定)において、帰納法、演繹法に対しての誤認識が根強いことを批判した。

- 11、拙稿「漢籍訓点資料における訓読語の位相と文体——複製資料に依拠した研究を巡って——」(『古典語研究の焦点』平成二十二年一月、武蔵野書院)。

「付記」

本稿を、本年四月にご逝去された築島裕博士に献じたい。築島裕博士には、物心ともに多大なる学恩を忝くした。学問上で最も影響を受けた方のお一人である。謹んで追善の縁となれば幸いである。

本稿の浄書にあたっては、京都大学・木田章義氏のご助言を戴いた。記して深謝申し上げる。